
恋心

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋心

【Nコード】

N4631A

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

哀は謎の男女に誘拐され、監禁された。そして哀は、自分がコナ
ンに恋心を抱いている事に気づく・・・

夏のある日、哀は阿笠博士の家のリビングでファッション雑誌を読んでいた。

それはそうだろう。

哀は子供ではないのだから。

本当なら、コナンと何か話をしたかったのだが、当のコナンは朝早くから本日発売の推理小説を買いに行っていて、いなかったのだ。

哀「（工藤君も好きねえ・・・推理物・・・まあ、そんな彼が好きなんだけど・・・）」

そんな事を考えていると、博士がリビングにやってきた。

阿笠「哀君、君の母親から手紙がきておるぞ」

哀「ええ！！？」

阿笠「ほれ、ここに・・・」

哀「博士、貸して！！」

そう言くと、哀は博士から手紙を引ったくった。

手紙を読んだ哀は、その場に凍り付いた。

「拝啓・阿笠博士様。

私は灰原小雪と申します。

このたびは私の娘を預かっていただき、ありがとうございました。今度、帰国しますので1日だけあの子と話をさせてください。」

哀はガクガクとふるえた。

なぜなら「灰原哀」は彼女が博士と一緒に考えた江戸川コナンと同じ架空の名前、その哀に親がいるわけがない！！女のカンかはわからないが、哀はすぐに直感した。

哀「（まさかこれは、黒の組織のしわざ・・・！？工藤君に知らせなきゃ・・・）」

哀がイヤリング型携帯電話を出そうとした時、玄関のベルが鳴った。博士が出ると、20代前半の女性が立っていた。

小雪「哀、元気にしてた？」

哀「あなた、誰？」

哀は即、言い返した。

小雪「まったく、文代のトコのコナン君といいすぐスネるんだから・
・・こんにちは阿笠さん、私が哀の母の小雪です。」

『ちがうの、博士!!』と言おうとした哀だが、小雪に口を塞がれてしまった。

阿笠「はあ、あなたが・・・哀君は元気にやっておりますぞ」

哀「モゴモゴモゴモゴモゴ~~~~~~~~!!モゴモゴモゴモゴモゴ~~~~~~~~ッ!!!!(何納得してるのよ博士~~~~~~~~!!これはりっぱな誘拐よ~~~~~~~~っ!!!)」

小雪「じゃあ、今日1日哀を預かりますので・・・」

暴れる哀だったが、口を塞がれている上に小雪の方が力が強い。

あっさり連れ出され、助手席に座らされてしまった。

哀は困ったが、この女の正体を確かめようと思い、ついて行く事にした。

哀「ねえ、あなた、誰なの？」

哀は冷静に聞き出した。

小雪「あら、自分の胸に聞いてみれば・・・?それとも、まだ自分の立場がわかってないのかしら・・・シェリー？」

小雪の低く冷たい口調に、哀は、ええっ!!?という顔をした。

哀「(バ、バレてる!!!この人、やっぱり組織の・・・!!に、逃げなきゃ・・・)」

哀はシートベルトを外そうとした。

しかし小雪は、不敵な笑みを浮かべた。

小雪「やっとなづいたようね・・・でも、もう遅いわよ・・・」

小雪がそう言うと同時に、後部座席にいた何者かが、哀の口をハンカチで塞いだ。

哀「うつ！！！（ク・・・クロホルム・・・！！工藤君・・・助け・・・て・・・！！！！）」

気を失った哀は、バツタリと助手席に倒れてしまった。
気絶した哀を乗せたまま、車はどこかに走り去った。

哀「うつ・・・」

哀はうめき声と共に目を覚ました。

哀「うつゝん・・・まだ気分が悪いわ・・・さっき嗅がされた薬のせいかしら・・・」

哀はひとまず立ち上がろうとして、自分の状態に気がついた。

哀「て・・・手が・・・！！」

哀の両手は、動かせないようにしっかりとロープで縛られていた。

その上、体も身動きできないようにぐるぐるに縛られている。

だが幸い、両足は縛られていなかった。

哀「これなら、なんとか立てそう・・・」

哀は立ち上がろうとしたが、バランスを崩して転がってしまった。

哀「キャ~~~~~！！！！」

しばらくゴロゴロ転がった後、何かの箱にぶつかってやっと止まった。

哀「イッタゝい・・・こんなトコ、工藤君には恥ずかしくて見せられないわね・・・」

哀がそんな事を考えていると、突然足音が聞こえた。

哀「だ、誰か上がってくる・・・！！（そうだ、寝たフリしていよう・・・）」

そう考えた哀は、気絶しているフリをした。

その後、ドアが静かに開いた。

???「コイツか、シェリーという科学者は」

小雪「ええ、まだ薬が効いて寝てるみたいだわ」

哀は、後ろをチラリと見た。

哀「（か、仮面の男・・・！？）」

男の姿を見た哀は、体がビクビクとふるえた。

なぜならその男は、シルクハットにマントと全身黒ずくめで、不気味な仮面をつけていたからだ。

哀でなくともふるえるだろう。

仮面の男「それで、この娘を匿っていた工藤新一というガキは、まだ見つかってないのか？」

小雪「ええ、マンダリンが必死になって探しているところよ・・・」

仮面の男「そうか、では下に降りている、サンテリア」

サンテリアと呼ばれた小雪は、ゆっくり下に降りていった。

仮面の男「工藤新一を捕らえるまで、オマエは生かしておいてやる。

せいぜい寝たフリをしている事だな、宮野志保君・・・」

そう言うと、仮面の男は下に降りていった。

哀「バレてたのね・・・これからどうしよう・・・なんとかこの縄を解いて、工藤君に危機を知らせたいけど・・・」

哀は、自分の両手を縛っている縄に目をやったが、どう考えても子供の、しかも女の力では解けそうもない。

とりあえず、縄を解くのはあきらめた。

哀「そうだわ、探偵団バッジは・・・」

幸い、探偵団バッジは気づかれていなくらく取られていなかった。

続いて、携帯はと目をやった。

これも取られていない。

哀「これならいける！」

哀は転がった反動でイヤリング型携帯電話を取り出すと、急いで電話番号をプッシュした。

哀「お願い工藤君・・・早く出て・・・」

その頃コナンは、毛利探偵事務所で涼んでいた。

コナン「あつっ……マジで暑い……」

あまりにも暑いので、なにか飲もうと冷蔵庫を開けた。

コナン「それにしても、灰原はどうしたんだ……？話がしたかったのに……」

コナンがジュースを飲もうとした時、イヤリング型携帯電話が鳴った。

コナン「誰だよいったい……はい、もしもし……」

電話から聞こえてきたのは、哀の叫び声だった。

哀「工藤君、助けて！！私、誘拐されたの……」

コナン「なんだって！！それで今、どこにいるんだ？」

哀「古いアパートみたいな所よ……」

コナン「それでオマエ、動けるのか？」

哀「動けないの……後ろ手に縄で縛られてて……」

コナン「オマエをさらったヤツは、どんなヤツだった？」

哀「1人は私の母親と名乗ってる小雪って女で、もう1人は仮面の男よ……あ、そうだわ工藤君！あと1人マンダリンっていうのがいて、あなたを捕まえようと探してるわ……」

コナン「小雪、マンダリン、そして仮面の男か……（妙な感じがするな……）安心しろ、すぐに助けに行つてやる！おとなしくそこで待つてろ！」

哀「うん……待つてるわ……」

コナンは電話を切ると、毛利探偵事務所をあとにし走り出した。

コナン「灰原待つてろよ！すぐに助けてやつからな！！」

コナンが走り出した頃、哀は彼の事を考えていた。

哀「待ってる、か・・・私、やっぱり工藤君の事が好きなのかな・・・こんな絶望的な状況でも、必ず彼が助けに来てくれるって信じてる・・・」

そんな事を考えている哀が、気づくはずもなかった。

背後から忍び寄る仮面の男に。

仮面の男は哀に近づくと、一瞬のうちにハンカチを哀の口に押し当てた。

哀「うつ！！！（ダメ！クロロホル・・・ム・・・！！）」
気絶してしまった哀。

仮面の男は縄を取り出し哀の両足を縛ると、布で哀の口を塞いで部屋から出て行った。

なぜか、窓を開けて・・・。

一方、こちらは米花町を全速力で走っているコナン。

コナン「灰原が探偵バッジを持っていれば、このメガネで居場所がわかる・・・」

コナンは犯人追跡メガネのスイッチを入れた。やはり、バッジがメガネに反応した。

コナン「ここから700メートル先か・・・待ってるよ灰原！！」

あつという間に、コナンはアパートにたどり着いた。

コナン「着いたはいいが、どうやって入ればいいんだ？」

コナンが上をのぞくと、なぜか窓が開いていた。

コナン「窓が開いてる？不自然だが、まあいいか・・・」

コナンは違和感を感じながらも、塀に軽々とよじ登って窓の下の屋根に飛び移り、窓をのぞき込んだ。

コナン「は、灰原!!」

そこには手足を縄で縛られ、口を布で塞がれている哀が寝かされていた。

哀「ん、んんんん!?（く、工藤君!?）」

コナンは窓から入り込むと、哀にかけ寄り、縄と布を解いた。

コナン「大丈夫か、灰原？」

哀「工藤君！ありがとう・・・!!」

哀はコナンに抱きついた。

少し赤面気味のコナン。

コナン「ここから脱出するぞ。窓も空いてるしな」

哀「でも、ここから飛び降りても下で捕まるんじゃ・・・」

コナン「大丈夫だ、オレを信じる！今はヤツらより灰原の方が大事だ!!」

哀「工藤君・・・」

仮面の男「フツ、今回は合格だな・・・」

コナンと哀が振り向くと、そこには仮面の男と小雪、マンダリンが立っていた。

哀「工藤君、この人達よ！私を誘拐したのは・・・」

コナンはしばらく3人を見つめていたが、突然大声で笑い出した。

コナン「フッフ・・・ハッハッハ!!」

哀「く、工藤君・・・？」

哀はきよんとしている。

コナンは仮面の男に向かって叫んだ。

コナン「もうヘタな芝居はやめようぜ・・・なあ父さん？」

哀「ええ!!!？」

驚く哀の前で、男は仮面とシルクハットを取った。

その正体は新一の父、工藤優作だった。

優作「さすがだな、新一……」

哀「こ、この人って、あの有名な工藤優作!？」

コナン「そう。世界的な推理小説家さ。それに母さんと博士も、とつくにバレてるぜ?」

有希子「さすがね、新ちゃん……」

阿笠「スマンな、哀君……」

有希子と博士は笑うと、次々に変装を解いた。

哀「ゆ、有希子さんに博士……」

有希子「それにしても、よく私達だつてわかつたわね?」

コナン「バーロー、わかるよ……仮面の男つていえば、父さんの小説に出てくるナイトバロン……オレは前にも同じ事をやられたからな……」

哀「でも、有希子さんは?」

コナン「オマエ、「コユキ」つて言っただろ? ひらがなに直して並べ替えれば、「ユ・キ・コ」になるじゃないか……」

哀「あ、そうか……」

哀はやつと納得したらしい。

コナン「最後の1人が博士だつてわかつたのは、オレとオマエの正体を知っていて、かつこんなイタズラに協力するのは、博士か服部しかないって思ったからさ。」

阿笠「見事じゃ、新一君!」

コナン「で?なんでこんなイタズラしたんだよ?なんか理由があるんだろ?」

優作「さすが新一だ、そこまでバレていたか……実は、インターポールの友人からオマエ達を小さくしたAPTX4869のデータが手に入ったと聞いたんだ。それで、この事を報告する前にオマエの覚悟を試そうと思って、この計画を立てたんだよ……オマエが

ドアを破ってオレ達を捕まえようとするようなら、不合格にしよう
と思っていたんだが、オマエはオレ達を倒すよりも、哀君の事を先
に考えた・・・100点満点で合格だよ、新一・・・」

コナン「ああ・・・オレは何があるうと、灰原を守るー!」

有希子「それで、哀ちゃんはどうするの?」

哀「私も、絶対に工藤君を元に戻しますー!」

優作「うむ、これで安心して新一を任せられる・・・」

有希子「来年ぐらいには、孫の顔も見られそうね・・・」

コナン・哀「な、何言ってるの?2人共・・・」

優作「いや、新一を婿にもらってほしいと話しているのだが。」

コナン・哀「えええええ!!?」

コナン「な、何言ってるんだよ父さん!!」

哀「そうですよ、私は工藤君を元に戻すって言っただけでー!!」

優作「いや、仲よさげなのでつきり互いに好意を持っているモノ
と・・・なんだ、ちがうのか・・・?」

コナン・哀「い、いやそれは・・・」

優作・有希子・阿笠「ん~~~~~?」

コナン「す、好きだよ!灰原の事・・・」

哀「わ、私も工藤君が好きです・・・」

優作「やつぱりそうか!」

有希子「じゃあ、今から5人で遊びに行きましょうか!」

と、なかば強引に白状させられたが、オレと灰原は両想いになった。
しかし、この時黒の組織の魔の手は、すぐそこまで迫ってきていた。
・
・

「黒の組織との決戦!!そして・・・」に続く!!

（後書き）

どうでしたか？哀がコナンに恋心を抱く話。

この小説は、後の連載小説「黒の組織との決戦！！そして・・・」につながっている小説です。そちらも合わせてお読みください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4631a/>

恋心

2010年12月14日17時30分発行